

日本の実存的美意識

大阪芸術大学 教養課程 教授 純丘 曜 彰

日本人は、美意識そのものを美として求めているのではないか。一般には、美は、なんらかの対象の属性であるとされる。それも、美の片鱗を分有しているのみで、美そのものは、絶対に人間の手の届かない永遠不変のアイデアである、とされる。ところが、日本では、きわめて日常些末矮小卑近な物事においても、そこに美を見つけ出し、作り出すことができる。

当初、日本の美を研究するに当たって、日本の代表的な美術作品を確定し、それらを西欧などの作品と比較して、日本の美の特徴を明らかにしようという、きわめてオーソドクスなアプローチを考えていた。ところが、あらためてリストアップしてみると、たしかに日本の美として美術全集に載せられ、世界に知られる作品は数多あるものの、北斎の神奈川沖を除けば、モナリザやダヴィデ像に相当するような、一時代を画した天才芸術家のマスターピースがあまり見当たらなかった。

その大半は、フェノロサの時代に異国情緒のジャポニズムで注目されたもの。また、外国受けするバサラ、カブキ、ケレンなどのポップでキッチュな「日本文化」は、中世末期から延々とあるが、それらはあくまでクラシックな美意識に対する大衆の反動的なサブカルチャーであって、これらの存在はむしろその対極にあるけばけばしいものを嫌う、クラシックな美意識、いわゆる侘び寂びの美意識の強固な存在を示している。

実際、卯花塙のような国宝級の名物となると、西欧的な意味では、むしろ地味で、どこが美しいのか、とてもわかりにくい。というのも、はてなの茶碗のように、実物以上に故事来歴が箔となるからだ。名所も、そこであった出来事、歌われた歌などによって、美しいとされ、能などに採り上げられる。幽玄夢幻の美としてよく引かれる定家の「見渡せば花も紅葉も無かりけり、浦の苫屋の秋の夕暮」のように、無いからこそ、そこに感じる侘び寂びの美がある。石しか無い枯山水に、かつての水のせせらぎ、そして、その絶えた静寂の音を聞き取る能力がなければ、日本の美はわからない。

バウムガルテン以来、西欧美学は、対象にある美の主観的認識方法を問い、実践哲学を立てたカントですら、美についてはむしろ無関心無関係の観想的判断力へと後退してしまっている。しかるに、日本の美は、いくら見てもわからない。むしろカントとは逆に、なにも無い景色に対し、知識と想像を総動員して自分が積極的に関わっていく必要がある。つまり、それは、

自己定立の実践そのものであり、物事といかに自分が向きあい、関わっていくかが問われる。だから、連歌などの場で、あわれを歌い詠むことで、その美意識の真贋が吟味されるのだ。

日本人にとって、美は見るものではなく為すことであり、それが自分自身を成すことになっているのではないか。このように考えるなら、日本に芸術的なマスターピースが見当たらないのも理解できる。歌の前に詞書（ことばがき）が付くように、作品はある時ある場での自分自身との関わりにおける即興的なものであって、永遠不変たりえない。

つまり、日本において美は、対象ではなく、美を見つけ出し、作り出す美意識の主体性こそある。それゆえ、けっして特別な対象だけでなく、きわめて日常些末矮小卑近な物事においても、そこに日本の美は見える。この美意識優位のあり方は、定家の〈有心〉、世阿弥の〈夢幻〉、利休の〈わび〉、芭蕉の〈かろみ〉、北斎の〈漫画〉などの理念に唱えられている。とくに観阿弥が提起した〈幽玄〉は、もともと中国古代の老荘思想に発し、無為自然・変幻自在の〈道〉を示すために用いられた。

そして、〈優美さ〉は〈道〉の体得体现であるが、しかし、アプリアリな美意識そのものは空虚であって、現実の物事との関わりにおいてのみ実体化する。いやまさにその臨機応変の柔軟さに優美さがある。だから、老子に「道の道とすべきは、つねの道にあらず」とあるように、これを外形的に定式化し、その顰みに倣っても、猿真似にしかならない。このため、その美的活動は、〈漂泊〉の旅として遊び、むしろ現場を訪れ、みずからの人生と故事来歴のある対象を切り結ぶことにおいてのみ可能となる。

キルケゴールは、現世の有限一時のものを追う美的実存を、むなしさに挫折するとして、倫理的実存、宗教的実存に劣るとした。しかし、ありもしない永遠不変のものを追い、有限の自分、目の現実を忘れて、なにが実存だろうか。日本では、仏道や神道はもとより、歌道、書道、茶道、華道、さらには、武士道や種々の武道においてもやはり、結果の優勝劣敗よりも、独特の美意識そのものの〈優美さ〉に重きが置かれている。日本で美は生き方の問題であり、生き様、死に様における陰徳の美、有終の美が問われる。この日本の美意識は、西欧美学によってただ美の傍観者に貶められてしまった我々に、自分自身の美的実存の可能性を思い出させてくれるのではないか。